

〈共同研究報告〉

明治末期日本人の中国人日本留学に対する認識

呂 順 長

一、はじめに

清末中国において、その鎖国の戸は早くイギリス人に破られたにも拘らず、民族の覚醒は、開国が十余年も遅く、而も我が中華文明を吸収し続けていた「東夷小国」日本との甲午の役（日清戦争）に敗れた後のことである。敗戦によって「宝島」台湾を割譲し、清朝政府の年間財政収入の三倍に当たる巨額の賠償金を支払わされたのみならず、三国干渉に端を發した列強の中国分割の勢いが高まりが起き、中国は亡国の危機に瀕した。このような状況の中で、若き光緒皇帝が康有為らの「公車上書」を受け、

日本モデルを中心とする国政改革「戊戌変法」を実行したが、西太后ら保守派によるクーデターで失敗に終わった。その後、戊戌政変を起こした清朝保守派が義和団事件（北清事変）のショックを受け、自らいわゆる「新政」を打ち出し、制度改革に取り組んだ。この二つの改革の背景と推進者はそれぞれ違うが、両方とも日本をモデルとする改革措置が多く見られ、その中に科挙制度の漸次廃止や日本留学の奨励、新式学堂の設立などが大いに提起された。清末の中国人日本留学はこのような背景の下に始まり推進され、さらに日露戦争直後はピークに達した。

こういう時期に展開されていた中国人の日本留学に対して、日本人はどういう認識を持ち、また留学生たちをどう扱っていたか、明治末期の新聞雑誌に見る関連記事を中心に、ほかの資料を交えながら、考察してみたい。

二、血と涙の結晶

甲午戦争後の一八九六年、近代日本文化交渉史に大きく記し入れるべき事件が起こった。古くから日本留学生の受入れ国だった中国がはじめて日本に十三名の留学生を送り出したという歴史の大逆転と言うべき事件である。これに対して、日本人がどう

いう反応を示していたかを知りたくて、調べてみたが、次の淡々とした報道しか見つからなかった。

横浜駐在の支那領事呂賢笙は過日上海に赴きしが、其用向は寧波蘇州地方の青年十三名を選び、日本語研究のため、東京に官費留学せしむるに⁽¹⁾由にて、西京丸にて右青年を伴ひ帰任する筈。

しかし、この十三名の来日はあくまでも日本留学運動の幕あけとしか言えない。この舞台に多くの留学生が登場し始めたのは二年後の一八九八年である。当時、維新の論議が益々高まる中で、浙江・湖南・湖北など開明派が総督や巡撫をつとめる省は相次いで留日学生派遣計画を立て、本格的な日本留学をスタートさせようとし、日本人の注目を引くようになった。

支那の俊傑張之洞門下の学生は、先

頃来朝せしが、今回又湖南、湖北の二省より、日本留学生二百名を選出し、近々の内、我国へ派遣する。(中略) 近来の一快事と言ふべし。⁽²⁾

清国が四五年前までは我を軽侮し我を嫌悪したるにもかかわらず、一朝反省する所ありて、今は則ち我邦を尊敬し我邦に依頼して、人材を挙げて其教育を我邦に託するに当り、我邦は抑も如何の覚悟を以てこれに当らんと欲する⁽³⁾か。

明治初年、同じ欧米列強に不平等条約を強いられた中日両国が正式に国交を開き、お互いに対等国家関係を樹立した。その後、日本は国力増強と不平等条約改正の運動を精力的に推進し、西洋化を徹底させ、国力が増強する一方である。これに対して、中国は「中体西用」の指導思想のもとで洋務派官僚たちが洋務運動を展開していたが、根本的な改革が出来ず国家が弱体化の一途を辿る。こういう中で、中日両国間では平

等な関係が樹立されたにも拘らず、日本は欧米列強の真似をし、不平等条約を中国に押しつけようとし、台湾出兵などを経て甲午戦争に踏み切るに至った。中国側の敗戦は、中国人にとっては西洋に敗れるより精神的打撃が遥かに大きいものに対して、日本の勝利は明治維新以来の西洋化の努力の結果であり、また文明の勝利とされ、国民に多大な自信を持たせた。こういうなかでの中国人留学生の来日は、上述の記事からも容易に読み取れるように、旧弟子であった日本が古来わが師と仰いでいた中国に尊敬されるという喜びを多くの日本人にもたらしたのである。

二十世紀に入って、在日留学生数が絶えず増え、さらに一九〇四―一九〇五年には三千人近くから八千人以上まで急増し、ピークに達した。この盛況ぶりを見て中国の大国的度量を称える人もいるが、次のような認識が一般的であった。

往昔我より彼に学びたるも今や地位

転倒しかかる多数の清国人が、其国の内外にあるとを問はず、我日本に学ばんとするの盛なる顕象を呈するに至りたるは吾国の名誉なり、是れ我国民が血と涙とを以て成功し、若くは成功しつつある、日清戦役、及び日露戦争の効果の大部分を占むるものと見て不可なるべし。⁴⁾

甲午戦争の敗戦に刺激されて日本留学がスタートしたというのは前述の通りであるが、日露戦争の日本側の連戦連勝が中国人の日本留学を大いに促したのである。そもそも、中国東北部の支配権を奪い合うために行われる日露戦争はどちらが勝とうと被害国の中国にとっては問題ではない。しかし、近代に入るまで中華民族にとって外患といえはほとんど北方民族からであったという歴史的教訓と、三国干渉後ロシアが中国東北を独占する野心が露骨化するという現実から、ロシアに対しては強い警戒心を持っていた。しかし、日本に対しては、甲

午戦争後日本の中国に対する積極的な外交の成果があったためか、警戒心より感服または親近感を抱いていた。留日学生はもちろん、国内の人も、日露戦争のことを知らない者以外に、日本の戦捷を望まないものはないと言われるほど、日本の勝報が伝わってくる、みんな喜んでいて。

しかし、知識層ではこういう感情の裏にもう一つの期待があったようである。専制国のロシアに立憲国の日本が勝てば、中国における立憲の議が盛んになろうというものであった。そのみならず、黄色人種と白色人種の優劣敗問題にもかかわっていると議論されていた。

このように、甲午・日露両戦役の日本側の勝利は中国人にその富国強兵の成功経験に注目させ、黄色人種としての自信と希望をもたらしめた。さらに日本の協力を得ながら、富強化の道を探り、外敵を防ぐとする念願さえ一時的に広がっていた。こういう中で推進された中国人の日本留学を多くの日本人が我が国の名誉と国民の「血と

涙」の結晶と見ていたのである。

三、共同利益の所在

国際間の事はお互いの利害関係に影響されるところが大きい。利害さえ同じならば手を携え、利害相反すれば戦いさえも辞せぬという例が多い。清末の中国人日本留学も中日両国にとって共同利益があつてこそ成り立ったのである。これについては、当時早稲田大学の学監である高田早苗氏が次のように見解を述べている。

支那人を教育するは、支那人の利益のみに非ず、また我日本の利益なりと云う考えが大切である。斯く言えば、日本の野心を以て支那人を教育せよと云う考えの如く誤解せらるる虞があるか知れないが、決してそういう意味ではない。支那と日本とは一時のみならず永遠の利害が同一であるから、誠心誠意支那のために図れば、その結果自然日本の利益となると云うのである。⁵⁾

中日両国は同文同種だから親密の関係を保つべきだという論調が盛んだった当時、高田氏の共同利害説はある程度新しい意味合いをもっていると思われる。「同文同種はかならず間柄が善いと云う訳ならば、歴史に英米戦争、独逸戦争と云うが如き事実のあるべき筈がない」、と彼は同文同種論を批判し、野心を以てではなく、誠心誠意を以て相手のために図れば自然によい結果となると主張する。

さらに中国人の日本留学は両国にとってそれぞれどんな利益があるかについて、高田氏は述べているが、それによると、中国人にとって日本から新学を学ぶ最大のメリットは便利であること、また日本側から言えば、日本人に就いて学ぶ者が多ければ、間接直接に日本を理解する者が増加するといふ。

確かに中国人にとって、日本は欧米より道が近く、物価が安いというのはもちろん、欧米に留学して、その「蟹行文字」を習う

より、同文の日本にきて東文東語を覚えるほうが遥かにはやい。さらに一步進めて言えば、凡そ外国の文明は取捨選択を経て初めて自国に用いるべきものであって、日本を経て多少東洋化された西洋の学問を受け取ることは中国にとっては大きな利益であると言わねばならない。日本は中国より三十年も先立って、日本国独特の長所を發揮し、西洋文明の消化吸収に努めてきた。この様に日本によって東洋的に消化された西洋文明・西洋学問を中国がもう少し細かく咀嚼して消化吸収するのは、中国にとってはこれほど便宜の事はなからう。

中国人の日本留学の利益は単に中国のほうにのみある訳でなく、日本側にも少ないのである。それは中国人留学生が日本に來て費す所の金額が大きいため、日本は少なからぬ利益を得ると思われがちであるが、この様な有形の利益より無形の利益のほうが遥かに大きい。歴史からみて、アメリカ留学した者はアメリカを愛し、フランス留学した者は自然にフランスを好むとい

うように、日本に來て新学を学んだ中国人が日本に対して理解を深め、好意を持つのは普通である。これは両国が友好関係を深める上に大いに役立つ、無形の利益となる。とはいえ、中国近代留学史関連の研究分野などでは、ほぼ定説になっているほど、「アメリカ留学した者はアメリカに親しみ、日本留学した者は反日する」という言葉をよく耳にする。これはアメリカ留学に比べると、確かに日本留学帰りの人の中に日本を批判していた者が割に多いが、その中から多くの「知日者」と日本人と親しく付き合っていた者が出たのも事実である。また、留日学生に日本批判者が割に多かった原因について考えてみれば、日本軍国主義者の中国に対する侵略、中国人留学生の教育を大陸への勢力樹立の長計とする一部の政治家の打算、日清戦争後広がり始めた中国人に対する輕蔑、の三つがあげられよう。

四、勢力樹立の長計

一八九八年から留日学生が多くなり始め

たもう一つの背景は日本側の働きかけである。

甲午戦争の敗戦によって中国は莫大な国益を略奪されたばかりでなく、政府の腐敗無能と軍事力の衰弱が徹底的に露呈された。列強が遼東半島の中国返還のための三国干渉と、政治条件付きの借款を通して、中国での「勢力範囲」の分割を着々と進め、ロシアは東北、ドイツは山東省、フランスは雲南・広東・広西、イギリスは揚子江流域を自分の勢力範囲にしようとし、中国分割は最高潮に達する。

このような西洋人の中国蚕食を見ていた日本も台湾の対岸にある福建省を勢力範囲にし、鉄道敷設権を獲得しようとした。直接清政府との交渉にあたっていた時の矢野文雄駐清特命全権公使は交渉をスムーズに進展させるため、中国側に「わが国政府は中国とますます友誼を敦くせんと欲す。中国は人材を需むること孔^{はな}だ急なりと聞く、若し学生を選派し、出洋学習せしむれば、我が国において、その経費を支出す可し。

人数は二百人以内に限る」と働きかけた一方、外務大臣西徳二郎に次のように報告している。

福建省内鉄道の議に關し申進文中記載の通り、其の要求を提出せんとなれば、筆舌の友情以外に實際の友情、即ち清政府が今日に在って喜悅すべきの模様なきにもあらずと觀察せらるる留學生の教育を引受くべき事を申込たらんには、今度の要求を成功せしむるに効力あるのみならず、我國の感化を受けたる新入材を老帝国内に散布するは、後來我勢力を東亜大陸に樹植するの長計なるべしとの次第を茲に敷衍せば、其武事に従ふ者は日本の兵制を模倣するのみならず、軍用器械等をも我に仰ぐに至るべく、士官其他の人物を聘用するにも日本に求むるべく、清国軍事の多分は日本化せらるること、疑を容れず、又理科學生は其の器械・職工等をも之を日本に求むるなるべく、清国

の商工業をして自づから日本と密接の關係を有せしめ、随つて我商工業を清國に拡張するの階梯とも爲るべし、又法律・文學に關する學生などは、専ら日本の制度に則り清國將來の進運を謀るべし、事若し此に至らば、我勢力の大陸に及すこと、量る可らざるものあらん。而して清國官民が我國に信頼するの情は亦た今日に十倍すべし。是等の學生が日本に対する緣故より、將來に於いて清國自から進んで続々學生を我國に送出するに至り、我國の勢力は暗々裏に東亜大陸に増進すべし。

一八九八年以後、留學生が少しずつ増えるにしたがつて、それに関する論議が多くなり、留學生教育による勢力の扶植という主張がよく登場するが、これほど詳しく論じられたのはこれが初めてのものである。ここにみられるように、留學生の教育は中國人の信頼を得るだけでなく、諸分野における中國への影響が期待でき、勢力樹立の

方法でもあるとされる。

甲午戦争後、日本においては中国に対して「分割論」と「保全論」が唱えられていたわけである。列強の中国分割の真最中に、アジア情勢に対して強烈な危機感を抱き、「支那保全」や「日清同盟」を唱えながら、

張之洞や劉坤一らの地方高官に対して、日本への留学生派遣の緊要を力説した者も少くなかった。貴族院議長・東亜同文会会長近衛篤磨、参謀本部の福島安正や宇都宮太郎などはその中心的な人物であった。保全論には、中国侵略を目的とするものと、両国が真に「唇齒相依り輔車相援ふ」べきだという中国侵略を非としているものがある。しかし、分割論であろうと、保全論であろうと、中国人留学生の教育に積極的に取り組みべきだと主張するのは皆一致していた。

吾日本国民は如何なる覚悟を以て是等珍重の留学者を教養す可きか、彼等の一成一敗は実に支那将来の通塞に關す尤も大なるのみならず、清国におけ

る吾勢力の消長に關するもの亦莫大なるを知らざらんや。之を人道に照らし、之を一国の利害に鑑み、吾人日本国民が是等留学生の教育に従事す、決して是れ軽々看過す可きの事業にあらず。

此等学生たる、悉皆彼国学生中の秀才逸足なり。其門閥位置の如き、蓋し中等以上に位するもの、而して其海を越えて来遊せる所以のもの、一に自国の文物制度を刷新するの素養を造らんとがためにして、多年学業を終へ、帰国する時は必ず相当の位置を得、文明の扶植、国勢の振興上、常に主動的地位に立つべきものなれば、我邦の此等学生に對する、決して尋常普通の学生を以て目すべからず、必ず丁寧嚴肅に之を教育、待遇し、以て善隣の好を竭くし、我邦の仁義に厚き所以を知らしめざるべからず。(中略)或は、其教育待遇の方法を粗漏放漫にし、甚しきは二十七八年戦役大捷の威を藉り、或は、

目するに戦敗国の学生を以てし、徒に傲慢疎暴を以て、彼等に対するものなきを保すべからず。若し我教育者にして、此の如き举措に出でんか、遂に彼等学生をして厭忌の情を起さしめ、次第に我邦に來遊するを欲せざるに至るべく、啻に我邦の体面を損し、我邦の名譽を傷つくるのみならず、我邦が清國に對して、尽すべき天職を汚し、善隣の好を薄くし、將來東亞問題大湧起の時に當り、互に握手並鑑するの道を失はんとす。

ここからまず読み取れるのは中国人留学生の教育が国家の利害、或いは中国における日本の勢力の樹立にかかわるということである。しかし、それはまた人道の上から考えたものであり、日本の天職でもあると主張される。このような「人道」論と「天職」論も往々にして一緒に唱えられ、その風潮が十九世紀末から留学生の来日と共に始まり、義和団事件と日露戦争を経てだん

だん高まっっていく。

人道の上より見れば、我が邦は夙に
 欧米文化を輸入して東西思想の中心点
 となり、たとひ弱点非難は多々之あり
 とも、大体に於いては人權の発達自由
 の伸張教育の整備各種文明要素の発展
 は遙かに彼に優るあれば、清国人を教
 育し扶掖するは、人道のため文化のた
 め世界の幸福平和のため吾人が人類と
 して此の世に生存する以上は、当然務
 むべき道なりと云ふべし。又之を国家
 の責任上より云えば、我邦と清国とは
 唇齒輔車の関係あり、清国の頑迷を覚
 醒して世界列国の大勢に適応せしむる
 は、東洋永久の平和を得んが為にはや
 むをえず成さざるべからざる事にして、
 我邦は之が為に国家の存亡を賭しても
 屢戦ひ、財政経済の困難を来すを予
 知しても種種の計画を実行したる所に
 して、幸に戦勝の結果国威益々揚がり
 声望列強を凌ぐに至り、清人の来り学

ぶもの年と共に増加するを見るなり。
 故に我が国家が之等留学生の啓導に務
 むるは、我が在来の国是を完遂せんと
 する一方法を励行するに過ぎずして我
 が国家が其の享有せし天職を行ふ所以
 の一大義務たるに外ならず。

このような議論展開は日清・日露両戦争
 の戦勝による日本人のセルフイメージの変
 化につながると思われる。特に日露戦後、
 日本は東洋一小国という劣等感から完全に
 抜け出し、「東西思想の中心点」である世
 界の一等国という自己認識が強まる。この
 ような東西文明の総合者、アジアの先覚者
 としての日本が利益のためだけでなく、こ
 の統合文明を頑迷な清国に広める為に、そ
 の留学生を誘導啓発するのは人道であり、
 天職であるという。
 さらに中国人留学生の教育を引き受ける
 のは隣国人に対する好意と同情心によるも
 のである、というのにもよく見られる。両国
 は近隣で、古来の文化的関係もあり、思想

感情の共通するところも他国に比べていっ
 そう親密で、歴史上幾度か争闘敵視したこ
 とがあるとはいえ、友好往來の歴史が長く、
 人種も大体同一で、言語も互いに学びやす
 く、宗教も共通点があり、名実共に隣邦で
 ある。しかし、この四千余年の歴史を有す
 る隣国はいま列強のためにその領土が蚕食
 され、その利益が独占され、殆ど瀕死の状
 態に陥り、四苦八苦している。我が日本人
 がこの様な隣邦人に対して同情を払い、好
 意を持ってその成功を援助しなければなら
 ないという。

以上のように日本人の中国人留学生教育
 の動機について多く議論されているが、そ
 の主流はなんであろうか。中国人日本留学
 史の研究の第一人者ともいえる故実藤恵秀
 氏は『中国人日本留学史』の中で、それは
 「まずいわゆる『日支親善』のためである。
 『日支親善』というのは、中国が日本の言
 うことを聞く、日本びいきの中国青年を作
 る、ということである。早稲田大学清国留
 学生部の教育責任者青柳篤恒が一人の支那

青年を多く養成するのは日本の勢力を一步大陸に進む所以の大計といったのは、最も明らかにその目的を表している。この考えの教育者が一番多かった」と述べている。

五、豚尾奴と佳賓珍客

明治時代において、甲午戦争までは、文明開化が推進される一方の日本とは反対に、中国は亡国のほかはない「未開野蛮」の国家で、「アジア東方の悪友」と鼓吹する者もあったが、二千年にわたり中国の伝統文化の影響を受けてきた日本には中国を先師の国と仰ぐ劣等感はむしろまだ残っていた。そういう国民感覚に大きな転機がもたらされたのはいうまでもなく甲午戦争の勝利である。そして義和団事件後、ことに日露戦争の日本側勝利が日本中心の自意識をさらに高めると同時に、中国軽視の風潮が益々エスカレートしていく。

一八九六年来日した最初の留学生の十三人中、四人が一月もしないうちに、日本留学をやめて帰国してしまった。その理

由の一つは日本の子供からの「豚尾奴」というひやかしに耐えられないというもの。そもそも「豚尾奴」というのは留学生が来日する前の明治二十年代の新聞、とくに中国商人が多く住んでいた神戸とか長崎などの地元の新聞にたまに見られる。例えば、

強情な豚尾奴 南京町に住む清国人中には毎日小間物包を肩に掛けて市中の家内をウソウソ覗き、事によれば下駄の一足でも盗み兼ねまじき風体の豚尾奴が沢山あり、其価も非常に不廉にて偽物の珊瑚珠も一円とか二円とか掛値をいひ、仕舞には僅か四十五銭に負くるはよいが、中には一品にても買ざればその場を動かざる事は度々なるが……⁽¹⁰⁾

というように、この段階では、普通の日本人の中国人蔑視は彼等が軽蔑されるような生業についていることから生じたものが多い。場合によっては、軽蔑されると知り

ながら、その軽蔑をものともせず、目的を達成するために頑張っていくことは中国人の優れた特性とさえ理解される。

しかし、日清戦争後、日本の子供さえ中国人留学生を見るなり、「豚尾奴」と騒ぎ立てるようになる。さらに、日露戦争後は留学生の日記に「豚尾奴」とひやかされながら、数人の子供に石を投げつけられたということさえ見られる。このような中国人蔑視は次の「学生と車夫の対話」からも端的に窺える。

日本には識字者が甚だ多く、車夫でも新聞を読み外国のことをよく知っている。日本がロシアに打勝つてからは、ほかは勿論、車夫さえも中国人を軽蔑している。学生を引いて、前こごみに走る時でも、ときおり、後ろを顧みて卑しむようすをする。車夫がある学生にたずねるには、「日本ト露西亜トハ戦争シテ、イマ日本ハ戦勝シタ、你等知ルカ」。日本に来たばかりで、相手

が何を言っているか分らない者が、その場逃れで答えて曰く、「ソデラス」。車夫がそれを聞いて、更にいい気になつて笑つて聞く、「ソテナラ、你等ハ羨チャナイカ」。学生がやはり分らないので、又答えて曰く、「ソテス」。車夫は学生には自分の言う事が分らないじゃないかと分つて、又続けて言う、「支那人ハナンテモ知テナイショウ」。

このようなやり取りには、東京にいる学生が一日に数回も遇うが、それを聞く度に心が痛み、述べるのが恥ずかしい。それを自分の身で感じた者は、憤りと恥じを覚えた⁽¹¹⁾だろうか。

このように中国留學生が蔑視される原因はまず「瀕死の国からの劣弱な国民」という基本的対中国人認識にある。しかし、全く環境の違う国から来た留學生が持つ習慣、とくに衛生習慣の悪いことなども市民レベルの軽蔑の生じた原因の一つとなる。もとより日本留学できた学生は裕福な家庭の子

弟が殆どで、そのなかには秀才や華人以上の肩書きを持った者も少なくなく、中国においては尊敬されているほうである。にも拘らず、日本に来て三々五々街を歩いて見た彼らは日本人の目には「恰も海中を遊泳する小魚の群の如し」に過ぎなかつた。當時中国人の国民性についての論議に不潔、懶惰、不実、欲張り、愚昧、不得要領などの言葉がよく見当たるが、ほかは扱置き、日本にきている留學生たちの不潔については日本人がどう見ていたか、取り上げてみる。

彼等が下宿屋にある状態を一見せば、更に驚くべきものもあるなり。某氏の隣地にも清国人の下宿屋ありて、聞く所に依れば朝より夕に至るまで其騷擾いふばかりなく、且つ其不潔なる沙汰の限りにして、洒掃したる某氏の庭園に向つて窓よりして唾痰を吐き、同氏の庭園の一部は恰も彼等の痰壺なるかの如き觀あり、又支那は文字を尊ぶの国

なれば、反古などは疎かにせまじと思ふの外、實際彼等の放棄したること実に甚しく、同氏の庭園の一隅は彼等の放棄したる反古と唾痰とを以て山をなせりと其の不規律なる事甚しと云ふ⁽¹²⁾。

又彼等の寄宿舎にある者は、二三か月も湯に入らぬなどは珍しからず、故に学校にて取締上舎内に浴場を設けしに、一日に二三度も入浴する者もありしと⁽¹³⁾か。

このような一部の留學生にあつた、日本人が見るに忍びないほどの悪習慣は「劣弱な国民」への実証的なものとなり、留學生軽蔑を加速した一因であつたらう。

しかし、周囲の中国蔑視の風潮が強まる中で、中国から来た留學生を熱心に教育したり、世話したり、またその状況改善のために呼び掛けたりする、好意を持つ日本人も少なくなかつた。軽蔑の中の友好と言つていいだろう。

中国人留学生の教育に取り組んでいた人に、最初の留学生教育を引き受けた嘉納治

五郎、女子留学生を教育していた下田歌子、中国人の教育に身を投じた松本亀次郎などもよく知られているが、魯迅が唯一の恩師と仰いでいた藤野先生は留学生に親切にしてくれた数多くの人達の代表といえよう。

「中国は弱国である。だから中国人は低能児である」という認識が国民の間にはぼんやりとした当時のことについて、藤野先生は「悲しいことに、日本人がまだ支那人をチャンチャン坊主と云ひ罵り、悪口を云ふ風のある頃でしたから、同級生の中にもこんな連中がいて何かと白眼視し除け物にした模様があったのです」と同級生のなかにあった中国人蔑視の様子を回顧し、自分が少年の頃漢文を教えてもらったので、「とにかく支那の先賢を尊敬すると同時に、彼の人を大切にしなければならぬ」という気持ちを持っていたという。⁽¹⁴⁾これは一見素朴そうなものであるが、中国人留学生にとっては闇の中の光のようなものであった。

だからこそ、藤野先生が魯迅にいつそう深い印象を与えたのであろう。

また、中国人留学生を大事にし、彼等の状況を改善するように呼び掛けていた人達もいた。中国革命に深い関わりがあった宮崎滔天がその一人であろう。明治三十九年九月五日に彼は『革命評論』に発表した「支那留学生について」という一文の中で、まず留学生たちを「佳賓珍客」と見做し、彼等のおかれた悪境遇を披露し、最後に次のように警鐘を鳴らしていた。

寄語同胞 寄語す、我が日本の当局

者、政治家、教員、商人、下宿屋主人、下女、掏兒、窃盜、淫売婦諸君よ、諸君が日夕豚尾漢として軽侮し嘲笑し、詐取し、貪絞し、誘惑する支那留学生は、将に來らんとする新支那国の建設者也。彼等は今垢を含みて諸君の侮辱を甘受しつつあり。然も心中豈に一片慊焉の情なからんや。彼等を侮辱するは彼等の侮辱を買ふ所以也。而して侮

辱の交換は鬭争に終るを知らずや。殊に支那の強大を恐るるの士人は、深く思を此処に致して可也。⁽¹⁵⁾

民間人だけではなく、一部の政府関係者も誠意を持って留学生教育に取り組むように主張していた。一八九八年八月二〇日、文部省専門学務局長上田万年が論説「清国留学生に就きて」を『太陽』（四卷一七号）に発表し、切に「清国留学生全般についての教育問題が我邦教育界の一大問題」となることを希望して、具体の留学生教育管理方法を提案していたし、また、前駐清国公使大島圭介は「清国に対する古今感情の変遷」という講演で、留学生について「希くは我文武官中関係の人は、其教導に誠意を竭し、衣食住の便を与え、日夜誘掖して至懇の友情を尽し、今や昔時に受けし師導の恩義に酬い」るようにと述べている。⁽¹⁶⁾

六、終りに

留学生と日本人及び日本政府の間に起きた事件に対する報道を通して、明治末期日本人の中国人留学に対する認識を考察するの必要である。一九〇五年末に日本政府が中国清朝政府の依頼を受け、名義上留学生教育の強化をはかるとはいえ、実際は留日学生の政治活動の取締を狙う「清国人ヲ入学セシムル公私立学校ニ関スル規定」を打ち出し、留学生から大きな反発を招いた。いわゆる清国留学生取締規則事件は最も大きな事件であり、これをめぐって多くの報道や論評が出されている。ただこれについては実藤惠秀氏の『日中非友好の歴史』の中に詳しく取り上げられているので、ここでは触れないことにする。

〔共同研究班〕

総合雑誌『太陽』の総合的研究

注

- (1) 『教育時論』四〇二号、明治二九年六月二五日、内外雑纂欄。
- (2) 『教育時論』四七一号、明治三二年五月二五日、内外雑纂欄。
- (3) 上田万年「清国の留学生に就きて」、『太陽』四卷一七号、明治三二年八月二〇日。
- (4) 寺田勇吉「清国留学生問題」、『中央公論』明治三八年一月一日。
- (5) 高田早苗「支那人教育に就て」、『太陽』一二卷九号、明治三九年六月一五日。
- (6) 「清国留学生の教育引受の義に關し啓文往復の件」、外務省外交史料館所蔵「在本邦清国留学生関係雜纂」。
- (7) 社論「清国革新の微光・清国留学生に就て」、『中央公論』明治三二年九月。
- (8) 「清国留学生の待遇に就いて」、『教育時論』四七八号、明治三一年七月二五日。
- (9) 野田五郎助「支那人教育に就いての所感」、『教育界』五卷一一号、明治三九年九月三日。
- (10) 「強情な豚尾奴」、『神戸又新日報』明治二五年五月一五日。
- (11) 夢芸生「傷心人語」、写本、一九〇六年。
- (12) 寺田勇吉「清国留学生問題」、『中央公論』明治三八年一月一日。
- (13) 「清国官費留学生」、『教育時論』七一四号、明治三八年二月五日。
- (14) 藤野巖九郎「謹んで周樹人様を憶ふ」、『文学案内』昭和一二二年三月号。
- (15) 宮崎滔天「支那留学生について」、『宮崎滔天全集』第四卷、平凡社、昭和四八年。
- (16) 大鳥圭介「清国に対する古今感情の變遷」、『太陽』五卷一〇号、明治三二年五月五日。